

わたしたちにとって 書物とは何か

商学部 瀧口 美香

研究最前線



Mika Takiguchi

商学部准教授 西洋美術史

- 1996年 早稲田大学大学院文学研究科
修士課程修了
- 1998年 ロンドン大学コートールド研究所
修士課程修了
- 2003年 ロンドン大学コートールド研究所
博士号取得
- 2005年 明治大学商学部専任講師
2008年より現職

【主な著書】

『ビザンティン四福音書写本挿絵の研究』創元社、2012年
"Some Greek Gospel Manuscripts in the British Library: Examples of the Byzantine Book as Holy Receptacle and Bearer of Hidden Meaning," *The Electronic British Library Journal* (2011) .

【主な所属学会】

美術史学会、地中海学会

在外研究で2010年4月から2012年3月にかけて滞在した英国においても、ハードカバーやペーパーバック(紙とインクによる印刷の書籍)が電子書籍に取ってかわられるだろうか、という議論が多くなされていきました。この問に対して「いいえ」と答える人たちは、「人間というのは感覚の生き物だから、本という物体とのフィジカルなコンタクトが重要であつて、それがなくなるといふことはありえない」と主張します。一方「はい」と答える人たちは、「人間というものは、とかく面倒くさがりやで易きに流れる。レコードの表裏をひ

っくり返すのが面倒な人たちがCDに飛びつき、CDの出し入れが面倒な人たちがUSBに飛びついた。同じように、場所を取る、重たい、カバーから何を読んでいるのか人に見られてしまう本よりも、Eブックの方がはるかにすぐれているということには目に見えていると語ります。この議論をするに当たって、「そもそも人間とは」といふことから始まるのが英国のおもしろいところです。

「書物とはいったい何だろうか」という疑問を持つようになったためです。わたしはロンドン大学においてビザンティン美術史を専攻し、ビザンティン帝国で制作された四福音書写本挿絵の調査を行ってきました。そしてロンドン大英図書館、ヴァティカン聖使徒図書館、パリ国立図書館の写本閲覧室に通っているうちに、上のような問に行き当たりました。というのも、数百年前に制作されたビザンティンの四福音書写本を数十冊、次から次へと手に取ってページをめくりながら見ていると、明らかに現代の「書物」という概念には当て



2012年11月に刊行された筆者による初めての単著、『ビザンティン四福音書写本挿絵の研究』（創元社）

図1 ロンドン大英図書館所蔵 典礼用福音書抄本 add. 39063



はまらない働きが、そこに立ち現れて来るからです。

現在、聖書といえば旧約39書と新約27書をひとまとめに含むものを思い浮かべますが、ビザンティン時代には、新約の四福音書(マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ)による福音書のみを1冊の書物としたもの、すなわち四福音書写本が最も多く制作されました。この四福音書写本は、当然のことながら(現代の書物と同じように)そこに記されたことばを読むためのもの(典礼において朗読するためのもの)として作られたのですが、単にそれだけにとどまらない、はるかに大きな役割を担うものでもあったのです。

第一に、四福音書は「キリストをかたどるもの」として記されていました。聖堂において、司祭たちが列をなして執り行う行進では、四福音書が高く掲げられ、祭壇へと運ばれていきます。さらに、信徒たちの立つところから説教壇上へと運び出されます。こうした一連の動作は、キリストの生涯(死と復活)を象徴的に表すものと理解されていました。

神のことばと行いを記した四福音書は、キリストを象徴的に表すものであり、それゆえ新約聖書のその他の書たとえば使徒パウロによる書簡(なご)からは切り離された、まったく別のものとして1冊の書物にまとめられていたのです。

さらに、その外観も現代の書物とは大きく異なっています。1文字ずつ手書きで羊皮紙に書き写した写本は、分厚く、木の板の表紙がとりつけられていました。しばしばその表面は、象牙浮彫りや貴石、七宝によって飾り立てられ、典礼行進の際人目を引いたことが想像されます。それは、あたかも大きな重たい箱のような外観です。1冊の写本を繙く時、それは表紙をめくるといふよりは、箱の蓋を開くという感覚に近いのです。そう、写本は神のことばをおさめる、聖なる箱のようなものであったかもしれません。

1つ例をお見せしましょう(図1)。この写本では、羊皮紙全頁に十字架型の野線が引かれ、テキストはそのレイアウトにしたがって書かれています。つまり、200近いページ上で、

十字架型のテキストがごとごとく繰り返されるということです。テキスト自体は羊皮紙上に書かれた平面ですが、めくってもめくっても同じ形が繰り返されているために、平面上の十字架型が次第に立体的な厚みをおびているかのように見えてきます。わたしは、実物の写本のページをめくりながら、その視覚効果に大変おどろきました。写本自体に箱のような厚みがあり、その分の厚みが十字架型のテキストにも備わっているかのように見えだし、あたかも写本が、木の十字架をその中におさめた聖遺物容器であるかのように見えたからです。

ビザンティン写本のありようは、「そこに記された情報を得るために読む本」という、わたしたちの持っている「本」についての通念をくつがえすものであり、現代わたしたちが「本とは何か」「その機能とは何か」を考える上で、まったく別のところからそもそも本とはどのようなものであったのか、「その原点へと立ち返るようわたしたちに語りかけているように思われます。